

論理可能と推論

— 「してもおかしくない」「しても不思議はない」 —

宮 崎 和 人

1. 論理可能をめぐる

我々が何かについての可能性を問題にするのはどういうときであろうか。それはまず何よりも、可能性の有無・高低が我々のこれからの行動の決定に影響を与えるような場合であろう。降水確率が90%であれば、傘をもって外出するというように。また、昨日届くはずの荷物が届かず、何かトラブルがあったのではないかと、運送会社に連絡してみるというように。こうした事象については、「雨が降る可能性が高い」「トラブルがあった可能性がある」のように文として表現されるだろう。

このように、「～可能性が～」は、現実に向きあいつつ、確率的に可能性をとらえる表現であり、日本語の可能性をあらわす形式の代表的なものの一つであるが、これとはかなり性格の異なるものがある。筆者が「論理可能」と呼んでいるタイプである。英語ではモーダル助動詞のCANが能力可能にも論理可能にも使用されるが、日本語にはもっぱら論理可能をあらわすと考えられる表現として、「ありうる」がある。たとえば、次のような例は、何らかの根拠にもとづいておしはかっているのではなく、論理的に可能であることを提示している。

- ・「なるほど、河西を待合室に待たせた理由はそれでわかった。福岡署にはそのように依頼しよう。しかし、東京から安田自身が打たなくても、誰か、依頼をうけた代人が打つ、ということもありうるぜ」

(点と線)

また、次の例では、こうであろうという推測とは別に論理的な可能性を提示したり、現実におこっていることを話し手の論理によってうちけそうとしたりしている。

- ・「まあ、事故ということもあり得ますが、おそらくは自殺しようとなさったんじゃないでしょうかね」
(女社長に乾杯！)
- ・しかし現実には寺西保男は幼児猥褻行為を十六回もかさねていた。彼は、警官の前でひとつを白状すると、つぎつぎに全部を白状した。絶対にそんなことはあり得ない、と彼の母は警官の前でがんばったが、しかし事実は動かしようがなかった。
(冬の旅)

以上のように、論理可能をあらわす文は、現実のそとで、あるいは現実とは関係なく、論理的にないとはいえない、あるいは逆に論理的にありえないと話し手が考えるできごとをさしだす。

論理可能というものが日本語に存在することについては、すでに指摘がある。たとえば、高梨(2010)では、評価のモダリティと認識のモダリティの交渉の事例として、次のような論理的可能をあらわす「してもいい」を述語にする文が存在することを指摘している¹。

・「鍵が掛かっていたんじゃないですか」

「確かにそうなんです、お隣の窓はロックしてありました。しかし、泥棒なんですから鍵くらい開けてもいいもんだと私は思うのですが、どうなのでしょう」
(古畑任三郎1)

そして、「してもいい」がこうした認識的な意味(論理上、正しい可能性がある)をあらわすのは、何らかの推論が行われている文脈においてであり、論理的な帰結として予想される事態が現実には起こっていない場合、つまり、論理と現実との間にギャップがある場合に用いられることが多いとのべている。

宮崎(2024)では、可能性の意味の構成に否定の意味がかかわっているために否定のかたちで固定されている可能性の形式として、「～とは限らない」を取り上げた。そこでは、論理可能というみかたをあまり前面に押し出してはいないが、次のような例をみれば、そう考えてよいことがわかる。

・ 今でも、ふと、思うのですが、四月の初めでも寒い日があります。これも新しい言葉でいえば、寒冷前線が通過した日には気候はずれの寒さになります。老婆は殺された日、あまり肌寒いので、いったんしまいこんだ綿入れの袖無しを行李の中から引っ張りだして着たかもしれない。老人にはよくある癖です。すれば、綿入れを着ていたからといって何も冬とはかぎらないのです。四月でもいっつかまわないのです。つまり、小生の容疑者の犯行が成立するわけでございます。(点と線)

この例では、先行文「綿入れを着ていた」から推論によって導かれる「冬である」という結論が確実ではないとすることで、冬でない(四月である)可能性を論理的に導入している。

「してもいい」と「～とは限らない」による論理可能は、次のような関係にある。

- ・ 彼の実力なら、合格してもいいのだが。(高梨2010)
- ・ 彼の実力でも、合格するとは限らない。

つまり、いずれも推論が介在しているのだが、「してもいい」では推論の帰結として可能性を導入するのに対して、「～とは限らない」では推論の帰結に反する可能性を導入するというように、対称的な関係にある。

1 森山(2000)でも、「してもいい」の「論理的可能」をあらわす用法に言及している。

「してもいい」が論理可能をあらわすといっても、それは基本的な用法ではなく²、論理可能として解釈されるには、現実とのギャップの存在が条件となる(絶対的ではないが)。他方、文法化の程度は低いものの、論理可能をあらわすことを基本とする形式として、「してもおかしくない」「しても不思議はない」³がある。

・彼の實力なら、合格してもおかしくない／不思議(で)はない。

論理可能をあらわす形式は、時間性に関して、次のような特徴を共有している。まず、「することもありうる」「するとは限らない」の「する」にはテンス対立はなく⁴、「してもおかしくない」「しても不思議はない」を構成する逆条件形の「しても」にもテンス対立はない。これは、「する可能性がある」の「する」にスル・シタのテンス対立があるのとは対照的である。また、論理というものは時空間を越えて一般的になりたつことから、論理可能の形式は、次のように、ポテンシャルな可能性(なりたつ時間に限定がない可能性)をあらわすことができる。「する可能性がある」はこうした意味では使われにくい。

- ・ゆうパックは、翌日に届くこともありうる。
- ・ゆうパックでも、翌日に届くとは限らない。
- ・ゆうパックなら、翌日に届いてもおかしくない／不思議ではない。

このほか、否定形で固定されていて形式自体にみとめかたの対立がないものが多いという傾向がみられる⁵。

以上のことを踏まえ、以下では、小説やドラマのシナリオから収集した用例⁶を用いて、「してもおかしくない」「しても不思議はない」がどのように論理可能をあらわすかを記述していくことにする。

2 実際、用例も非常に少なく、「していい」「してもいい」を述語にする文をたくさんの用例にもとづいて詳細に記述した奥田(1996)には、ここでの論理可能の用法の記述がない。もっとも近いと思われるのは、「していい」を述語にする文が《場面可能》に移行し、さらに動詞が主体によってコントロールできない変化、状態、特性、関係などをさしだしている場合に、／当然である／あるいは／自然である／というような意味あいをとまう、《私》の肯定的な評価の表現になるとしている部分である。

3 「しても不思議はない」のかたちと「しても不思議ではない」のかたちがあるが、特に違いや使い分けはみられないので、変異として扱い、まとめて表記するときは前者で代表させる。「してもおかしくない」と「してもおかしくはない」についても同様である。

4 「したこともありうる」「したとは限らない」の実例は皆無ではないが、きわめて例外的である。

5 「しかねない」も論理可能に関係する可能性があるが、そのことについては今後の課題とする。なお、「ありうる」には「ありえない」という否定形があるが、両者の関係はみとめかたの対立以上のものであり、否定形には「信じられない」「あってはならない」といった感情評価的な意味あいがしばしばつきまとう(宮崎2016)。

6 本稿で使用する用例は、『古畑三郎』(扶桑社文庫)、「ストレートニュース」「パパはニュースキャスター」(伴一彦シナリオ)以外は、すべて新潮文庫による。

2. 「してもおかしくない」「しても不思議はない」と文法化

「してもおかしくない」と「しても不思議はない」は、論理可能をあらわす限り、基本的に相互に置き換え可能である。たとえば、次の例の「おかしくはなかった」を「不思議はなかった」に置き換えても意味はほとんど変わらない。

- ・「彼はまだ七瀬の読心能力を知らなかった。だが「彼」がすでに七瀬を、他の「自分に奉仕するために存在している人間たち」とは画然と区別し、対等につきあっている以上、普通の人間にない何かを七瀬が持っていることにうすうす勘づきはじめていてもおかしくはなかった。」 (エディプスの恋人)

形容詞の「おかしい」と「不思議だ」のもとの語彙的意味はかなり異なることから、「してもおかしくない」と「しても不思議はない」が相互に置き換え可能であることは、これらがそれなりに文法化していることを示しているといえるだろう。とはいえ、もとの語彙的意味をまったく失っているというわけでもなく、特に「してもおかしくない」の用例には、文法化が進んでおらず、もとの「おかしい」の語彙的意味を反映していて、論理可能とはいえないものも多数みつかる。

- ・「君の意見には僕も賛成だ。婦人は総じて内気なもので、ことさら婦人病等をあらわに診察されることを羞じらって嫌うものだ。きちんと診なければ分るものも分らない。これには僕も往生した経験がある。これらに対して女医が処することは大いに有益である。医学で女では学ばれぬという程の学科もないから、女がなってもおかしくはない」 (花埋み)
- ・「あなたのお宅に、多少私たちも権利があると分かったんで、二人で庭に一つ小部屋を造ってもらおうと決めたんです。一応ちゃんと、〈桑田・竹野〉って表札をかいて、一軒の家という体裁にしてみよう。そうすれば、三人で同じ家を買ってもおかしくないでしょう」 (女社長に乾杯！)

これらの例の「してもおかしくない」を「しても不思議はない」に置き換えることはできないだろう。そして、これらの「おかしくない」には、もとの「おかしい」の語彙的意味が残存していると感じられる。それは「変である」「問題がある」といった評価的な意味である。こうした例については、むしろ、デオンティックな可能との関係を考えていくべきかもしれないが⁷、今回の記述の対象からは慎重に除かなければならない。

一方、「しても不思議はない」については、そのような配慮はあまり必要ないのだが、やはり「してもおかしくない」に置き換えにくいものがある。

- ・ ミーシャたちを連行していったのが誰なのか、彼らはなぜ逮捕されたのか、いったいどこへ連れて行かれたのか、私には何もわからない。ただ、そうなるのも不思議ではないという気はした。あの少年たちを待っているのが、そんな結末だろうという予感があったのだ。「グッバイ・マイ・フレンド——」

7 「してもいい」がデオンティックな可能と論理可能にまたがるように、「してもおかしくない」も両者にまたがって使用されてもおかしくない。

というミーシャの眩きだけが残っていた。

(風に吹かれて)

・「ソ連の代理大使さんや」

女中さんが何でもなような調子で答えた。市内でも指おりの古い料亭、〈つば甚〉でソ連の代理大使と会っても、別に不思議はない。そんな空気が、最近の金沢にはある。いや、ずっと以前からそうだったのかも知れない。

(風に吹かれて)

実際、これらは、論理可能というより、／意外ではない／といった意味をあらわしている。ややまぎらわしいが、「不思議である」の語彙的意味の反映によるものとして、対象から除いておくのが無難であろう。

なお、「してもおかしくない」と「しても不思議はない」に共通することとして、「おかしくない」「不思議はない」の前に「少しも」「別に」「全然」などの副詞が挿入されることがあり、これも文法化の程度の低さを示す現象ではあるが、論理可能の意味の実現に影響するものではないため、そうした例も記述の対象とすることにする。

以下、「してもおかしくない」と「しても不思議はない」を述語とする論理可能文をディスコース構造とのかかわりを踏まえて記述していく。

3. 推論の帰結としての論理的な可能性

「してもおかしくない」「しても不思議はない」の用例を調べてみればすぐわかることであるが、推論の《帰結》の部分に「してもおかしくない」「しても不思議はない」が使用されることが非常に多い。これは、論理可能をあらわす「してもいい」と共通する特徴である。《前提》は、つきそい文として、あるいは先行文脈のなかに示される。以下、実際の用例をあげ、推論の《前提》となっている部分に波線の下線を、《帰結》の部分に実線の下線を引いておく。

- ・ 彼はいないのかもしれない。考えてみれば、それも当然のことだった。もし彼が本当にトレーニングを再開したのなら、夕方の今頃というのはジムに行っているもおかしくない時刻だったからだ。そんなことに、今はじめて気がついた自分に私は驚いた。心の片隅に、彼のカムバックを信じまいとする、何かがあるのかもしれない。(一瞬の夏)

- ・ (ついに信長は美濃の稲葉山城を陥したらしい)

このことはまだ真偽はさだかでないが、そのような風聞がこのあたりに伝わってきている。事実とすれば、尾張の富と美濃の強兵を手に入れた信長は、まるで野望に翼をつけたようなものだ。もはや天下を狙う志をたてても、おかしくはないであろう。(国盗り物語)

- ・ 藤田元成の六期下で、航空参謀兼後任副官をつとめていた河本広中は、「聯合艦隊の長官がいいと思うのは、出港の時ですよ」

と言っているが、一斉に動きを見せ始めたこの大艦隊が、ことごとく自分の部下だと思うことは、特別な感慨であつたにちがいない。

諷刺画の将軍のように、威厳を保って、少々胸を反らせてみたくなっても不思議はないが、山本五十六にはそういうところが殆ど無かった。(山本五十六)

これらに成立しているのは、おしはかりの場合のような、《根拠》と《判断》の関係ではない。推論の《帰結》として提示されているのは、おしはかりの結果ではなく、論理的に導かれた可能性である。

次の例は、先行文脈に《前提》にあたる部分がないが、明示的な推論はないものの、「異性の友人があるのはふつうのことである」という《前提》を踏まえているともいえよう。いずれにしても論理可能である。

・「あのひとに会いにいくでしょう」

としまがいった。

あのひとといわれても加藤には誰のことをいっているのかすぐにはわからなかったが、

「でも、きれいなひとね」

としまがつけ加えたので、彼女がいつているあのひとというのは、園子に違いないと思った。しかし、讚めるなら、^{*}きれいなひと、^{*}でいいのに、^{*}でも、といったのは、しまが決して園子を率直に美しいと讚めているのではない証拠のように思われた。

「そうではない」

加藤はふりかえっていった。ネクタイはどうやら結ばれていた。

「いいよ弁解しないでも。加藤さんだって、ひとりやふたり、女のお友だちがあつたって少しもおかしくはないことよ」

そして、しまはつめよるような眼をして、

「なんていうひと」

と名前を聞いた。失礼ないい方だったが、その失礼さを少しも意にかけていないようだった。当然聞く権利があつて聞くのだというふうないい方だった。(孤高の人)

こうした例をみて気づくことは、「してもおかしくない」「しても不思議はない」による論理可能文には、／当然だ／とか／自然なことだ／といった意味あいがあるということである。ただ論理的に「ありうる」というのではなく、そう考えることに合理性をみとめるのである。「ありうる」による論理可能文にはそのような意味あいがないとすれば、これは「してもおかしくない」「しても不思議はない」の特徴として重要であろう。そして、このことは、「してもおかしくない」「しても不思議はない」がディスコースのなかでどのように働くかということとも当然のことながら関係してくる。

4. ディスコースにおけるはたらき

前の節では、「してもおかしくない」「しても不思議はない」が、推論の帰結としてあらわれ、／当然だ／／自然なことだ／という意味あいの論理的な可能性をあらわすことをみた。以下、この意味分析の妥当性を、ディスコースにおける「してもおかしくない」「しても不思議はない」を述語とする文のはたらきかたの観察を通して、裏づけていきたい。

4.1 可能性判断

「してもおかしくない」「しても不思議はない」の例には、推論の帰結をそのまま可能性判断としてのべたものがある。前にあげた「もはや天下を狙う志をたてても、おかしくはないであろう。」(国盗り物語)がそれである。この例では、おしはかりの「であろう」とともに判断を構成している。次の例も、後続する「～に違いなかった」と対になって、判断を提示する部分に使用されている。

- ・「彼はまだ七瀬の読心能力を知らなかった。だが「彼」がすでに七瀬を、他の「自分に奉仕するために存在している人間たち」とは画然と区別し、対等につきあっている以上、普通の人間にない何かを七瀬が持っていることにうすうす勘づきはじめていてもおかしくはなかった。

一方「意志」の方は、これはもうはっきり、七瀬が精神感应能力者であることを知っているに違いなかった。(エディプスの恋人)

しかし、こうした独立した判断を提示する用例はそれほど多くはない。

4.2 推測の補強

比較的多いのが《推測の補強》としてはたらく例である。前にあげた例のなかでは、「もし彼が本当にトレーニングを再開したのなら、夕方の今頃というのはジムに行っているもおかしくない時刻だったからだ。」(一瞬の夏)がこれにあたる。この例は、「彼はいないのかもしれない。」という先行文脈で示した推測が、実は当然のことであったということを、推論を通して《補強》しているのである。

次にあげる例も、このタイプである。「これも飛行機を利用したに違いない。」という推理や「次野先生じゃないかしら？」という直観を《補強》する後続文脈において、それが自然な考えであることを示すために「してもおかしくない」「しても不思議はない」が使用されている。

- ・これを考えて三原は(待てよ)と思った。安田は二十日の上野発十九時十五分の《十和田》で青森に出発したと言っているから、彼はかならず二十日の午後までは東京にいたに違いない。あとから調査されることを予想している彼のことから、二十日をまるで東京を留守にしているような不用意をするはずがない。事務所かどこかにかならず顔を見せているであろう。すると二十日の午後から汽車で博多に行ったのでは香椎の現場に間にあわないから、これも飛行機を利用したに違いない。——三原は日航の時刻表をまた調べた。東京発十五時、福岡着十九時二十分という最終便があった。羽田まで車で飛ばせば三十分で行ける。安田がよそをまわって上野駅に行くからといって、二時すぎに事務所かどこかを出て行っても少しもおかしくはないのだ。

そこで、安田が利用したと思われる飛行機と汽車と、その推定行動を書いてみた。(点と線)

- ・次野先生じゃないかしら？

直観的にそう思った。先生がいなかにいた時分、「孤松」なんて号を持っていたかどうか知らなかったが、原稿の字を見ていると、どうも作文をなおしてもらった時の筆と、そっくり同じだ。

次野という名字は、そうざらにある名字ではない。それに先生は文学をやっているのだから、こう

いう雑誌に書くのも不思議ではないような気がする。——ああ、これが先生の原稿だったら！

(路傍の石)

さらに類例をあげておく。

- ・ 尾島久子が突きとばしたとすれば、よく分かる。夫が社長の地位を追われたと思ったら、今度は殺人容疑で逮捕されてしまった。総てはあの新しい社長のせいだ、と久子が憎しみを燃やしても不思議はない。 (女社長に乾杯！)

- ・ 「一緒に逃げる気かもしれません」

「まさか……」

とは言ったものの、何しろ伸子は昌也とすでに——週刊誌的に表現すれば——〈愛人関係〉にあるのだから、一緒に逃げる気になっても不思議はない。

「ともかく後を尾けましょう」

(女社長に乾杯！)

4.3 納得

次は、先行文脈でいったん示された疑問に対して、話し手・書き手が論理的に考えれば当然のことだと《納得》する文脈で使用された例である。このタイプも比較的多い。

- ・ 外山はびっくりしたような顔をした。どのくらいかと彼が聞いたのは、耐泳時間ではなく、五十メートル、百メートル、一マイル、そんな遊泳距離を期待しながら問いかけたのにたいして一日中と、ほとんど想像もしなかった回答になったのに、いささかあわてた。外山がなるほどなるほどと自分自身に納得をおしつけながらうなずいているのも滑稽であった。

「そうだ君の家は漁業をやっているんだっけ、それなら、きみが一日中泳ぐことができてても不思議はない。ところできみ、もぐるほうはどうかね、潜水だよ、この方は一日中というわけにはいかないだろう」

研修生たちがどっと笑った。

(孤高の人)

- ・ 小屋の入口は、半分以上砂にふさがれていて、ほとんど見透しがきかなかった。古井戸の跡だろうか？
砂を防ぐためには、小屋掛けの井戸があっても不思議はないわけだ。もっとも、こんなところから水が出るとは思えないが……のぞこうとして、こんどは本物の犬の体臭をあげせかけられた。動物の体臭というやつは、たしかに哲学以上の存在だ。

(砂の女)

4.4 説得

会話の用例に特有のタイプとして、理解不足の相手に対する《説得》のために用いられた「しでもおかしくない」「しても不思議はない」がある。たとえば、次にあげるような例である。こうした例には、かならず《前提》があり、推論する過程を示して、それが当然であることを相手に理解させようとしている。

- ・ 「マネージャーってわけですか」

「表面的にはそう見えるでしょう。事實は、女の子が注文を聞き違えたときに、おわびに行ったり、しつこく女の子に話しかける客を適当にあしらったり、顔でコーヒーを飲もうという男をとちめたり……」

「そんな男がいるんですか」

宮村はびっくりしたような顔であっちこっちを眺めまわした。

「ここは三宮よ。そういう人がいたって不思議はないでしょう」

(孤高の人)

- ・「神経科の先生が患者さんと親密になることってあるんでしょうか」

「唐突な切り出し方ね」

「思いついたもので」

「要は私たちは相談相手なんです。医者と患者という関係とはちょっと違うんです」

「相談相手ですか」

「親身になって話を聞いていれば、愛が芽生えても全然おかしくないんじゃないかしら」

「なるほど」

(古畑任三郎Ⅰ)

- ・みゆき「大塚さん、恋してるのよ」

竜太郎「本気で小暮のことを？」

みゆき「ううん、鏡さんに」

竜太郎「(予期していた)……」

みゆき「だって、話聞いてるとそうとしか思えない」

竜太郎「……やっぱりそうなのかな」

みゆき「鏡さん、5年振りに暮らしてやりにくかったっていうのは、女として愛ちゃんたちを意識してたからじゃない？ ということは、愛ちゃんたちだって鏡さんを男として意識してても全然おかしくないじゃない」

(パパはニュースキャスター・スペシャルⅢ)

4.5 理由づけ

前にあげた「いいのよ弁解しないでも。加藤さんだって、ひとりやふたり、女のお友だちがあったって少しもおかしくはないことよ」(孤高の人)という例は、弁解が不要であることの理由づけとして用いられた例であるが、次の例では、動作の実行の理由づけとして用いられている。

- ・喉がこわばって声がかすれている。——俺は部長なんだ。社長の信頼を裏切って……。しかし、部長なら、女の一人ぐらいいてもおかしくないぞ、そうだと！

「よし、行こう」

(女社長に乾杯！)

4.6 現実との対比

本来のことに現実のことを対比する文脈で使用されるのが論理可能文の特徴の一つであり、「してもいい」の論理可能文にはそうしたものがめだつが、「してもおかしくない」「しても不思議はない」については、そうした例はさほど多くない。前にあげた「諷刺画の将軍のように、威厳を保って、少々胸を反らせてみたくなっても不思議はないが、山本五十六にはそういうところが殆ど無かった。」(山本五十六)がそれであるが、ほかには次のようなものがある。

- ・日本から韓国へ向かう旅の、なんと物悲しかったことか。本来なら、どれほど晴れやかにしていても不思議ではない私たちが、箱崎のエアー・ターミナルを出発する時から沈み切っていた。気持ちがバラバラなのが皮膚に伝わってくる。それがいっそう気分を暗くしたものだ。 (一瞬の夏)

- ・ マホメッドの体面、丸つぶれというものである。十四歳といえは、もう大人あつかいされはじめてもおかしくない年齢だけに、そして、人一倍誇り高い気質のマホメッドだけに、耐えがたい屈辱であつたろう。 (コンスタンティノープルの陥落)

5. 疑問語をとまなう例について

すぐ前にあげた「本来なら、どれほど晴れやかにしていても不思議ではない私たちが、箱崎のエア・ターミナルを出発する時から沈み切っていた」(一瞬の夏)の例がそうであるが、「してもおかしくない」「しても不思議はない」の用例には、「いつ」などの疑問語をとまなうものがある。

- ・ 三日間つづいた見事な晴天は、その日の朝目を覚ますともう終っていた。空は暗い色をしたふ厚い雲に一分の隙もなく覆いつくされ、そこをとおり抜けやと地上にたどりつくことのできた太陽の光はその本来の暖かみと輝きのあらかたを奪いとられていた。そんな灰色にくぐもった冷ややかな光の中で、樹木は葉を落としたむきだしの枝を空に向けてまるでひびのような形にのめりこませ、川は固くこぼった水音をあたりに響かせていた。いつ雪が降りをはじめてもおかしくなさそうな雲ゆきだったが、雪は降っていなかった。「今日はたぶん雪は降らんだろう」と老人が僕に教えてくれた。
(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

この用法は「～とも限らない」にもある(宮崎2024)。

- ・ ガダルカナル島の戦局は久しく前から極限にまでおし迫っていた。完全に制空権を奪われ補給はつかず、ガ島は餓島と呼ばれ、その守備隊の鬼気迫る悪戦苦闘ぶりはラバウルの基地員の間でも半ば伝説めいてしきりと取沙汰されていた。思いがけぬ強力な米軍の反攻、それは内地では想像もつかぬほど、ガダルカナル島から幾つかの島を距てたここラバウルではひしひしと感じられたし、またいつその運命がこの島を襲わないとも限らなかった。 (楡家の人びと)

こうした疑問語をとまなう例は、「～とも限らない」に多くみられ、しかも「恐れ」といった評価的な意味とむすびついているのだが(宮崎2024)、「してもおかしくない」「しても不思議はない」の場合は、たしかに否定的な評価をとまなうことが多いものの、次のようにも使用されることから、評価性に関しては中立的であると思われる⁸。

- ・ アナウンサーの実況「予選を一位で通過し、金メダルが確実視されていたフランスのシモーヌ・エレー

8 田中(2010: 290)では、「おかしくない」「不思議ではない」を「無理もない」と並べて「諦念の感情が強く押し出されると、客観的事態にまで掂げられ、当然の事態である、といった強い判断に傾く」と説明している。論理可能というとらえかたはしていないが、「当然」という意味を見出している点は本稿と共通する。ただし、「諦念」という意味特徴は、本稿の分析からは得られなかった。この点については、扱っている資料の違いが関係していると思われる。田中氏は社説を使用しているのだが、「後文において何らかの注意喚起を読み手、聞き手にうながす」という指摘も、そのことと関係があると思われる。

ス選手が決勝直前に欠場しています。エレーヌ選手同様金メダル候補に上げられていた吉野麻子選手、しかし、苦しい泳ぎです。誰が一位になってもおかしくない展開です」 (ストレートニュース)

6. おわりに

以上、「してもおかしくない」「しても不思議はない」の用例調査にもとづき、これが推論の帰結としてあらわれ、／当然だ／／自然なことだ／という意味の《論理的な可能性》をあらわすことをあきらかにし、ディスコースにおいてどのようなはたらきをしているかについて分析してみた。

こうした組み立て形式では、文法化の程度の低さが問題となる。文法化の程度の低いものは、文法記述では、周縁的なものとされることが多く、詳しく記述されることはあまりない。たしかに、そうしたものの重要度は中心的なものより劣る。だが、一方では、それらの受け皿となる、記述の前提として必要な文法体系の枠組みが確立していないがために、放置されているといったケースも少なくないのではないと思われる。「してもおかしくない」「しても不思議はない」もそのケースではないだろうか。筆者は、日本語の可能文を記述する枠組みをモダリティーのなかに設ける必要があると考えている(宮崎2020)。

今後、論理可能文のパラダイムを考えることが必要になるが、論理可能の際限がどのあたりにあるのか、今の筆者にはまだみえない。だが、それをあきらかにするためには、推論、否定、現実との対比、テンポラリティー、時間的限定性、評価性、ディスコースにおけるはたらき、といった観点が重要である、ということはまちがいない。

参考文献

- 奥田靖雄(1996)「現実・可能・必然(中)」『ことばの科学7』むぎ書房
高梨信乃(2010)『評価のモダリティー—現代日本語における記述的研究—』くろしお出版
田中 寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
宮崎和人(2016)「論理的な可能性について」『岡山大学文学部紀要』65
宮崎和人(2020)「可能表現の研究をめぐって」『国語と国文学』97-10
宮崎和人(2024)「可能性と否定—動詞「限る」の否定形—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』57
森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティー」『日本語の文法3 モダリティー』岩波書店
渡辺慎昭(1989)「英語のモーダルな助動詞CANについて」『ことばの科学3』むぎ書房

付記

本稿は令和6年度JSPS科研費(課題番号24K03924)による成果の一部である。